

令和7年度 交通安全作文募集
優秀作品集

交通 安 全



令和7年度 山口県交通安全ポスター最優秀賞作品
(下松市立 公集小学校2年 長川 弥恵)

一般財団法人 山口県交通安全協会

交通安全年間スローガン

◎山口県

住みよい山口 いつも心に 交通安全

◎全国

☆自動車の運転者（同乗者を含む）に呼びかける部門

○急ぐほど 狹まる視野と 増すリスク

☆歩行者等（自転車等利用者を含む）に呼びかける部門

○親を見て 子供も止まる 赤信号

☆こどもたちに交通安全を呼びかける部門

○車から ぼくたちみえない 手をあげよう

はじめに

「住みよし山口　いつも心に　交通安全」　交通事故のない、住みよし山口県はみんなの願いです。このためには、県民一人ひとりが交通ルールと交通マナーを守り、そのいとを習慣づけないと何よりも大切です。

この作文集は、令和七年秋の全国交通安全運動の一環として、各警察署、各地区交通安全協会及び各教育委員会並びに各学校のご協力により、県下小・中学生から寄せられた三四六点に及ぶ交通安全作文の中から優秀な作品を選び編集したものです。

作品はどれも、いじのも立場から見た交通安全についての貴重な意見や考え方が素直に述べられています。

本冊子を交通安全意識の普及・啓発と交通事故の防止に役立てただければ幸いです。

令和八年一月

一般財団法人　山口県交通安全協会

会長　村田常雄

もくじ

小学校の部

最優秀

- わたしの自転車安全運転せんげん
○ヘルメットが守る命と未来

防府市立松崎小学校
山口市立井関小学校

三年

岸本真穂
三好美穂

優秀

- ぼくもりつぱな運てん手
○今日も無事に「ただいま」を
○青信号でも油断しない

山口市立井関小学校
山口大学教育学部附属光義務教育学校
周南市立徳山小学校

三年
六年
五年

片岡直之
松前愛梨
重永悠翔

優良

- みんなをまもるシートベルト
○あさのみちとこうつうあんぜん

山口大学教育学部附属光義務教育学校
周南市立沼城小学校

二年
一年

井上斗和
松前咲良

中学校の部

令和七年度 交通安全ポスター最優秀賞作品

- 私の思う交通事故の防ぎ方
- 車に乗っているときの見えない危険

山口市立湯田小学校
長門市立俵山小学校

五年

- 久保 小晴
- 三浦 浩登

最優秀

- 命を守るためにできること

下関市立東部中学校

二年

内田 健太

優秀

- 交通安全について

柳井市立柳井中学校

二年

岸田 稔実

- あたり前の安全を守るために

山陽小野田市立厚狭中学校

二年

末富 淳

優良

- 一人一人が気を付ける

和木町立和木中学校

三年

山田 千和

- 交通安全は、思いやりの心から

下関市立文洋中学校

二年

田中 彩結

小学校の部

最優秀

わたしの自転車安全運転せんげん

防府市立松崎小学校

三年 岸本 真穂

わたしは、三年生になつて新しい自転車を買つてもらいました。今まで乗つていた自転車が小さくなつていたのと、学校で自転車教室があるからです。うれしい気持ちでぴかぴかの自転車に乗つてみると、あつたことがあつたのです。今までの自転車と大きさがちがつていてるので、曲がり角がうまくまがれませんでした。ブレーキもうまく使いこなせませんでした。これでは、たいへんです。だからわたしは、安全な自転車の乗り方について

考えてみねりといつしました。

わざしあは、家族で自転車に乗つて実際に家のまわりの道路を走つてみました。お父さんの後をついていつて、止まる場所やタイミングについてかくにんしました。さらには道路は自転車を運転してゐるわたしたちだけではなく、車やトラック、バスなどが走つていました。歩行者、ベビーカーをおしている人、車いすに乗つてゐる人などがいました。これらのことから、自分のことだけでなくまわりの人のことを考えて運転することが大切だと気づきました。

まわりの人のことを考えながら運転するためには、交通ルールを守ることとたしかな運転じゅつがひとつあります。学校の自転車教室では、次の三つのことを教えてもらいました。一つ目は、しつこのある横だん歩道では、かなりず自転車からおりて左右をかくにんしてわたることです。二つ目

は、「止まれ」とこの看板があったときにはすぐ止まることと、三つ田は、自転車に乗るとかならず、ヘルメットをかぶることです。

夏休みには、山口県交通安全学習館に行きました。交通ルールのクイズをしたり、自転車のシミュレーターもしたりしました。自転

車に乗っての字を走行する練習もしました。どれも楽しく交通安全と自転車の運転をじゅつについて学ぶことができました。

これらの体験や学習のなかからわたしは、あることに気付きました。それは、「自転車は、車の仲間」だとこのことです。わたしは、はじめは、自転車は歩行者の仲間だと思っていました。小学校の自転車教室では、けいさつの方に教えてもらいました。さらに調べてみると自転車は軽車りょうとこのことかわありました。軽車りょうとは、自転車をふくめて人力車、馬車、リヤカーなどがあります。これらに乗るとときは、「自分は車」とこのこと

きをもつこと、歩行者のことを第一に考えることが大切だと思いました。

そこで、わたしは自転車で安全運転をするために次の五つのことをせんげんします。

その一 ヘルメットをかならず、正しくかぶります。

その二 交差点では、じて岬と一時停止をまわって安全かくにこをします。

その三 暗くなつて運転するときはかなりすライターをつけます。

その四 左がわ通行をし、歩行者をゆう先します。

その五 友だちと二列で話しながら運転したり、スマホを見ながら運転したりする「ながら」運転はしません。

さて後にもう一つ。わたしは、まだ子どもだからお酒は飲めないけれど、大人の人には、自転車でも飲酒運転はぜつたうにダメだと伝えたいです。

ヘルメットが守る命と未来

山口市立井関小学校

五年 三好 美穂

「かぶるきっかけが事故では遅い。」

六月の誕生日、私は新しい自転車を買ってもらいました。ピカピカの自転車に心おどりせていると、その自転車販売店の壁にはられたポスターの文字に目が留まりました。その時、以前学校の先生に、

「自転車に乗るときはヘルメットを着用しましょう。」

と言われたことを思い出しました。私は正直なぜヘルメットをつけなきゃいけないのか? かつて悪いな: と思いました。しかしある日のニュースに、今年の三月、ワゴン車と自転車に乗った小学生の女の子が衝突したという事故が紹介されていました。その子は意識はあるものの、頭の骨を折る大ケガを負ったそ

うです。当時その子はヘルメットを着用していませんでした。

警視庁のホームページによると、自転車乗用中の交通事故で亡くなられた方の、六十四%が頭部に致命傷を負っています。また、ヘルメットを着用している場合と比較して着用していない場合の致死率は、約一・八倍と高くなります。このことからも、ヘルメットを着用して頭部を守ることがいかに大切かが分かります。

ところで、私の友達のお父さんが、二年前の冬、バイクで通勤中、軽自動車と衝突しました。足や腕の骨を折り、長そで、長ズボンを着用していたにも関わらず、服は破れ、何針も縫う大ケガを負つたことを覚えていました。しかし不幸中の幸いにも、しっかりヘルメットをかぶっていたおかげで頭部はほぼ無傷で一命を取りとめたのです。当時そのお父さんはこう言っていました。

「もしヘルメットをかぶつていなかつたり、命は無かつたとお医者さんによく言われたよ。」

この言葉を聞いた時はとても怖くなりました。確かにバイクは自転車よりもっとスピードが出ます。それに、もしもつたのがもつと大きなトライックだったり…そう考えたとき、「かぶるもつかけが事故では遅い。」といふ言葉の重さを改めて感じました。

二〇一三年四月一日から、道路交通法が改正され、すべての自転車利用者に対して、ヘルメットの着用が努力義務化されました。交通事故によるケガや死亡といった被害を減らすことが一番のねらいです。ただ現在はまだ「努力義務」のため、ヘルメットを着用せずに自転車に乗つても罰則はありません。しかし、万が一自分や家族、友達が、一瞬の油断で命を落とすことがあつたら、後悔してもしきれません。どんなに暑くとも重くても、髪型がくずれたとしても、命より大切なものはない

のです。

自転車販売店には、様々な種類のヘルメットがならんでいました。よく見る形以外にも、ぼうしやキャップのようなおしゃれな形のもありました。しかし、私の母は

「安全性の高いものを選びなさい。」

と言いました。ヘルメットの素材や構造は製品によって異なるものの、安全性が認められたものには認証マークと呼ばれるものが付いているそうです。マークには色々と種類があるのですが、デザインだけでなく、こういう視点でヘルメットを選ぶことも大切なのだと思いました。そして当たり前ですが、自分のサイズに合つたものを、正しい方法で着用するべきです。時々あごひもをつけずに頭にヘルメットをのせるだけで走つている人、自転車のカゴにヘルメットを入れて走つている人を見かけます。これではヘルメットの意味がありません。たまほどの友達のお父さんに、

事故の時にかぶっていたヘルメットの跡を
見せてもらつと、キズだらけでした。これが
もし頭だったら…そつ悪うしてきとうなかぶ
り方は絶対にしたくなつと思つます。

自分には関係ない。自分は事故にはあわな

い。以前の私もふくぬ、多くの人がそう思つ
てゐるのではないか。しかし、大切な
ものを事故で失つてからでは遅いのです。
今私は、自転車に乗る時必ずヘルメットをか
ぶっています。ヘルメットは、私の命綱であり、
周りの人を悲しませないための大切なお守り
だからです。命を守り、私たちの未来を守つ
てくれる大切なヘルメットを、私はこれから
も欠かさず身につけていふと思つます。



優秀

山口市立井関小学校

ぼくもりつぱな運てん手 三上岡直之

ぼくは、今年三年生になりました。ぼくの
小学校では、三年生になると自転車教室が
あります。そこで、交通ルールのべん強をして、グラウンドで自転車の運転のかくに
んをしてもらつます。合かくしたら、自転
車のめんきょがわらえます。

ぼくは、自転車にのるのがにがてでした。
すつじ、ほじょりんのある自転車にのつて
いたから、ほじょりんを外すとフリフリして
たおれてしまつかりです。でも、五円にある
自転車教室で、めんきょがわらえるよつじ、
四円から家で練習をはじめました。さうしょ
は、足で地面をけつて進む練習をしました。

そのあと、ペダルをこぐ練習をしたけど、何回もたおれてしまいました。何どもこけたけど、ぼくの誕生日におばあちゃんがかってくれたピカピカのヘルメットをかぶっていたおかげで、けがをしませんでした。

だいぶこげるようになつてきた時に、お父さんといつしょに近くの田んぼ道で練習をしました。カーブの練習をしてくる時に、ぼくは、土手から自転車ごと落ちてしましました。この時も、ヘルメットがぼくをまもつてくれました。

いよいよ自転車教室の日、ぼくはとてもきんちょうしました。けいさつかんのお兄さんと、見まもりたいの人が来てくれて、交通ひょうしきのクイズをしたり、交通ルールのべん強をしたりしました。その時、けいさつかんのお兄さんからひょうしきな合言葉を聞きました。「ふたはしゃぐる」という言葉です。これは、ぼくたちがのる自転車が安全なのか

を調べる言葉だそうです。自転車にのる前に、ブレーキがきくか、タイヤの空氣、ハンドルがガタガタしないか、車体をぐるっとかくにんベルがきちんとなるか、の五つをたしかめようといつ合言葉です。自転車をかくにんした後、グラウンドにかかれた道ろと歩道の絵の上を走りました。練習のせいかがあつて、ぼくは上手にのることができました。ひとつといひ、かつらじり自転車のめんきょがもうえました。これで、校区内なら一人で自転車を運てんでもらひやすくなります。

自転車のめんきょがとれたぼくに、お母さんが「自転車ものれば車のなかま入りだよ」と言いました。ぼくはこれから、自転車の運てん手さんになるから、安全運てんをしなじといけないとこつ意味だそうですね。これまでぼくは、運てん手さんといつたら、大人で車のめんきょを持つている人のことだと思っていました。でも、たしかに自転車は

歩く人に「ぐらぐら」とスピードが速いので、きけんな運転をしたら、「じ」をおこして、人をけがさせるかもしれません。これからは、ぼくもりっぽな運転手として、自転車にのる時は、「ふたはしゃぐる」をチェックします。

「これからは、バス停まで咲良をよのしへね。」と母が言つた。私と妹はバスで登校するが、バス停までは歩いて行かないといけない。私は大好きな妹と一緒に登校できることが嬉しくてたまらなかつた。

入学前の春休みに、母と妹の三人でバス停までの道のりを何度も歩いて練習していくた

め、私は何も心配していなかつた。しかし、初めて妹と一人だけで登校した日、私は妹と

今日も無事に「ただいま」を

山口大学教育学部附属光義務教育学校

六年 松前 愛梨

「ひ回來ます。」

私は、まだ頼りなし小さな妹の手を握つて母に手を振る。

今年、妹が一年生になつた。毎日、ドキドキとワクワクをランドセルにつめ込んで私と一緒に登校していく。

妹の入学式の日。

妹との登校に少し慣れてきたある日、妹歩道を歩いていくと、店の駐車場に入ろうとした車が突然こちらに向かって曲がつてきた。私は、とつさに妹の手を引き、妹を車か

ひびつた。その時妹は、「お姉ちゃんがいてくれて良かった。怖かった……。ありがとう。」

「お姉ちゃんがいてくれて良かつた。怖かつた」と無事に

ひとの嬉しさと安心が広かつてじつた。

それから、妹はこれまで以上に周りを確認するようになつた。私が青信号になつて横断歩道を渡りたいとした時、

「車が来てるよ。わっと確認してよー。」

と注意されてしまつたこともある。私は妹を守らないといけない立場なのに反省すると

共に、妹の成長を嬉しく思つた。例え、歩行者用信号が青でも、右折や左折で進んでくる車がある。だから、左右をよく見て、もし動いている車があれば運転している人ときちんと目を合わせて、私達に気付いてるかをしっかりと確認することが大切なのだと、母に注意されていたことを思い出した。

妹の大切な命を守りながら登校すること

は、誇りこころもあり、難しこころもある。私達が交通安全に気を付けて、「ただいま」と無事に帰宅するには、わが家の約束事だ。

私は、今日も妹の小さくてふわふわな手をひとつで登校する。

「ひつひまます。」

青信号でも油断しない

周南市立徳山小学校

五年 重永 悠翔

ぼくの家の前には、大きな横断歩道があります。登下校の時、ぼくは必ずそこをわたつて小学校へ行きます。その横断歩道は車の通りが多く、特に朝は大きなトラックもよく走っています。だから、毎日わたるたびにちょっときん張します。「安全にわたれるかな、車は止まつてくれるかな。」そんなことを思いながら、ぼくは信号の色が変わることを待

ちます。信号が青になつたからとひつて、すぐには心してわたぬことはできません。なぜなり、青信号でも止まつてくれない車や、急いで曲がつてくる車を見たことがあるからです。まくまく歩き出す前に右と左をしつかり見るより」とつてあります。

ある朝のことです。こつも通り青信号になるのを待つていて、青になつたので歩き出そとしました。その時大きなトランクが横から曲がつてきました。地面から「コホオオ」というイヤの音が鳴りひびいたしゅん間、ぼくは思わず立ち止まりました。その音はとても大きい、体にしん動が伝わつてくるよりに感じて心配がでキドキしました。

すると、運転手さんがぼくに気づいて、ブレーキをかけてくれました。大きなトランクが止まる時の空氣のゆれを感じ、ぼくはそこではじめて安心できました。そして、運転手さんの視線がこちらを見てくるのが分かりま

した。その時に「わやんと止まつてくれた」とこの合図をむりうたふりに聞いてました。ぼくはわい一度まわりを見てから横断歩道をわたりました。わたり終えた後、むねの中にはつてじたいわやかす一つとなくななり、「止まつてよかったです」とこの感謝の気持ちでこつぱこになりました。

この経験をしてぼくはこゝつかのことに気づきました。一つは、大きな車は止まるまでに時間がかかるところです。トランクやバスのように大きい車は、ブレーキをかけてすぐに止まることができません。だから、たとえ信号が青でも、急に飛び出してはいけないのだと思つました。もう一つは、運転手さんは見えにくることもあるところです。自分では「見えにくんだから」と思つてこても、運転席の位置が離れて、子供の姿は見えにくの場合があるのです。だから、ぼくが立ち止まつた時、運転手さんに気づいてもらえた

のはとても幸運だったのだと思つます。

この体験をしてから、ぼくは横断歩道をわたる時にもっと気をつかうようになります。ただ青信号を待つだけではなく、車の音や動きを耳と目で確かめることを意識します。特に大きな車が曲がってくる時は、一度止まって「きちんと止まつてくれるのか」を目で確認してからわたるよつにしています。車のドライバーと目を合わせることも大事だと学びました。ほんの少しの注意で自分の命が守れるのです。

思ひ出せばよつた園のことがです。登園する時には、ぼくはいつもお母さんと手をつないで横断歩道をわたっていました。その時、お母さんは「右を見て、左を見て、もう一度右を見よつね。」と教えてくれました。ぼくはただお母さんに言われた通りに首を動かし手をぎゅっとこまつてじるだけでした。正直その時は何の意味があるのかあまり分かつ

てこなかつたと感つます。でも今になつて考えると、お母さんの言葉にはとても大事な意味があつたのだと気がつきました。信号が青でも車が突つこんでくることがあるよつに、信号の色だけを見てじては守れない命があるからです。自分の目と耳で安全を確かめてから行動することが、交通安全の基本などと知つたのです。

また、もう一つ大事だと感じたことがあります。それは交通安全は自分だけのためではなくじつのことです。ぼくが信号を守らずにわたつてしまえば、車の運転手さんをあわてさせてしまつかもせんし、後ろを歩いてくる友達をまきこんでしまつかもせん。ぼくが気をつけることは、ぼくの命を守るだけでなく、まわりのみんなの安全を守ることにもつながります。だから、交通安全のルールは「自分のため」と同じく「みんなのため」に守るものなのだと感つます。

「これから先も、毎日横断歩道をわかつて小学校に行きまよ。そのたびにこのようになったトライックや車が通りかかるかもしれません。でもあの時の『わざと教訓、お母さんと一緒にわたつた』の思ひ出をわすれずに、しつかり立ち止まって目と耳で安全を確かめたいと思います。交通安全はみんなで守るもの。その気持ちをむねにしつかりと氣をつけてしまいたいと願うます。」

トをしめます。おかあやさま、わたしのあいあをせじてから、しまりせつしまわ。

「あなたがつづらしてくるときは、ぜったいに

シートベルトをはずしません。なぜなら、もしあ、じいにあつたときにシートベルトをしてしまつたら、この方がなくなつてしまつかりです。おかあやさんが「シートベルトは、だこじなやくらちゃんのこの力をまもるためにわづみのなんたよ」とおしゃれました。

わたしが団子のとき、おかあやさんのぐる

まにのつてしたじうまちをしてたたり、うしるからとつぜんほかのくるおがぶつかつたことがあります。そのときは、「ふとよわくぶつかつただけだったのに、みんながじでした。でも、とてもこわかったし、びっくりしました。それからしづりのあこだ、くるまにのつてつるときにはこわくてのこるをカラカラみてしまつほじでした。

優 良

みんなをまもるシートベルト

山口大学教育学部附属光義務教育学校

一年 松前 咲良

「つゆいぱいこんじつよ。」

わたしが、くるまにのつたらい、おかはジユニアシーマにわつて、じふんでシートベル

ねかあやさんがきをつたひのこしてて

も、いっしろからほかのくるまがぶつかつたりしてじこにあつたことがあるかもしないのでとてもこわいです。でも、シートベルトをしていたら、じのちをまもむことができるかもしれません。だからわたしは、これからもかなりおシートベルトをします。みんながシートベルトをして、せががへつたら、うれしいですか。

あさのみちといひつあんぜん

周南市立沼城小学校

1年 井上 斗和

ぼくは、あさあさ学校まであるいていきました。かえりはじのりのくわづから車でかえります。あさのあちは、車やじてん車がたくさんあります。とくに、大きなみちの前は、しんじうがあるのだ、青になるまでもあります。ぼくは、あさ田あるくとき、いひつあん

ぜんのやくそくをまわつてこまか。右と左をよくみて、車がきていないかたしかめます。青のしんじうでもすぐにわたらぬ、車がとまっているかを見まか。みちに大きい草や、かっこいい石があつても、あせばなじでまじめにあります。

らじ年、小学一年生になる妹がいます。今はすすまほじくさんになつていて、あわは車で行きます。でも、らじ年からは、ぼくといつしょのとくじうはんであるくじになります。妹はまだせじくさんなので、しんじうやひょうしきをよくわかっていないと思います。だから、ぼくがまもつてあげようと思つます。

妹が小学生になるまでに、学校まであぐれんしゅうをし



ます。大きなみちでは、とまつて右と左をじつしょに見まわ。青になつても、あわてて左にわたることをおしえてあげます。ぼくがしつかりしていれば、妹もあんしんして、たのしく学校にいけると思ひます。

こうつうあんぜんば、じ分のじのちをまもるためにたじせつです。でも、それだけではなく、大切な人をまもるためにもひつようです。ぼくは、妹といつしょに、こうつうあんぜんのやくわくをまわって学校にこゝりのと思ひます。

私の思う交通事故の防ぎ方

山口市立湯田小学校

五年 久保 小晴

「わっ、危ないー！」

朝、学校に行く道で自転車の男性と歩いている女性が曲がり角でぶつかりそうになつてゐるのを見かけた。自転車の男性は、スピー

ドを出して危険な運転をしていたわけではない。歩いていた女性は、イヤホンをつけ、スマートフォンを見ながら歩いていた。スピードが出ていたため自転車の人がよけてぶつか ragazzoにすんだが、歩いていた女性は、ぶつかりそうになつたことにも全く気がついていなかつた。イヤホンをつけていたので自転車の近づく音が聞こえず、スマートフォンを見ていたので、周りが見えていなかつたのもぶつかりそうになつた原因の一つかと思つた。

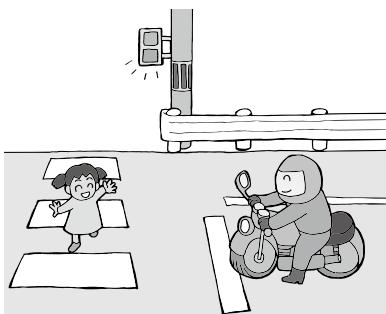
最近は、自転車に乗る人もイヤホンをつけていたり、スマートフォンを片手に持つて見ている人もいて危ないなと思つてゐる。自転車に乗る人ももちろん交通ルールを守らなければならぬが、歩行者も、もっと周りを見たり聞いたりして、自分の安全を守るべきだと思つ。

私の家の前の道はせまい。車が一台通るのがやつとの広さだ。雨の日は、かさをさすと

さりに車などとすれちがうのはむづかしい。毎日、学童から車で帰る時、他の車や自転車などがいたら、手前の道の広い所で待つてくれる。それらのがふつうだ。そして、相手が待つてくれることもある。そんな時には、おたがい片手をあげてあいさつをしたり、えしゃくしたりする。そうすると、おたがいに笑顔で気分がよい。しかし、すれちがえない所までつっこんでくる人もいる。広い所で待てばいいのに、みんななぜそんなに自分が先に行こうとするのかぎくに思う。

おたがいが相手にゆずりあえる心を持つてば、危険な場面が減るのでないかと思う。

みんなが交通ルールを守る事は大切だ



が、先の見えにくい曲がり角やせまい道、人や車が多く通行する道では、どんな危険があるか考えて、自分の安全を守ること、おたがいに相手をゆずりあえる心の余裕を持つことで、交通事故を防ぐことができるだろつか。

車に乗っているときの見えない危険

長門市立俵山小学校

六年 三浦 浩登

ぼくは毎朝、車で学校まで送つてもりつていまわ。雨の日や寒い日でもねれずに登校できるので、助かっています。でも車に乗るときや降りるときには、気をつけないとあぶないうことがあると気づきました。前に家族で出かけたときに、お父さんから「シートベルトをしつかりしめなさい。」と注意されたことがあります。ぼくは「ちょっとの距離だからいや。」と思つて、ベルトを引つぱるのがめん

どりで後回しにしていたのです。でも、お父さん、「事故は一瞬で起きたんだぞ。短い距離でも大けがになる」とある。「と聞いたのを聞いて、ハッとしました。

また、お母さんには「ドアを急に開けないで。自転車が来ていたり立つかるよ。」と言われました。そのとき、「車に乗る子供もじめ、事故をへらすためにやれる」とあるんだ。」と強く思いました。

車の中から外を見ていると、いろいろな危険が見えてきます。運転席からは小さな子どもや自転車が見えにくくなる場所があるのです。車のすぐ前や後ろは「死角」とこって見えない部分があり、急に人が出てきたように感じことがあります。駐車場でも、車のかけかげから人が出していくと運転する人はとてもびっくりします。ほくも一度、お店の駐車場で車から降りたとき、すぐ近くを自転車が通つて「わっ！」と声を出してしまいました。あのと

きもしもドアを思つ切り開けていたり、自転車の人掛けをしていたかもしません。ニュースでも、夕方や暗いときに見えにくくて事故が起きた話を聞いたことがあります。事故は運転する人だけではなく、車に乗るぼくたちにも関係があるので分かりました。

それでは、車に乗る子供もじめのことは何でしょうか。あず、必ずシートベルトをすることです。短い距離でも油断しおせん。シートベルトをすると体が座席に固定されて、急に車が止まつたときも安全だと知りました。それから、車から降りるときはドアを開けないように、後ろから自転車や車が来ていなか確認します。お母さんによく、「ドアは一気に開けないで、少しづつ開けて後ろを見てね。」と言っています。たしかにそのほうが、何か来ていないかをすぐ確認できます。車内では静かにして、お父さんやお母さんの運転のじやまをしないようにします。走つてくる最中に

あれこれ話しかけると、ハンドルを持つ手がピクッと動くのを見て、ぼくも話すタイミングを考えるようになりました。外を歩くときには、明るい服や反射材を使って、自分の存在を車から見えやすくします。習い事の帰りに、反射材のついたかばんがライトで光ってよく見えたので、「ぼくもいれかうりうりのを使つたほうがうらつな。」と思つました。

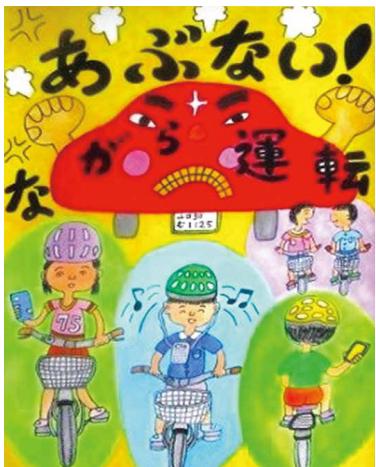
家族で出かけるときは、ぼくも気づいたことを語り合つておまか。「今、自転車が近くを走つてじたよ。」「トトは車が見え」「うだね。」と語ると、お父さんやお母さんも「それはカーブが多くてスピードを出せないですね。」といつと、お父さんが「お、よく見てるな。」と笑つてくれました。車に乗る子供でも、見えない危険を見つけて伝えることはできるのだと思つます。

トの前は、親せきの家まで長つづけで

したとき、途中で眠くなつてシートベルトを少しあるめにしました。でも、そのときお母さん、「眠くなつてベルトをしめたまま寝なわよ。外れたり危なじよ。」と言われ、ちやんとしの直しました。ぼくは「見えない危険」を自分で無視してはいけないと感じました。

交通事故をなくすためには、運転する人だけなく、車に乗る子どもも気をつけが必要があります。ぼくはこれからもシートベルトを忘れずにしめて、車から降りるときは後ろをよく見ます。そして、気づいた危険は家族や友達に伝えていきたいです。見えない危険をみんなで見つけっこばは、事故を減らせて、きっと事故の無い町に近づかれると思います。ぼくがそのためには、あやは自分ができることがをしつかり守つておまか。

交通安全ポスター最優秀賞作品



田布施町立東田布施小学校
3年 藤田 和葉



山口市立佐山小学校
4年 村藤 鈴花



下松市立公集小学校
1年 山下 実菜



下関市立楢崎小学校
5年 金尾 咲来



宇部市立藤山中学校
1年 川野 左來



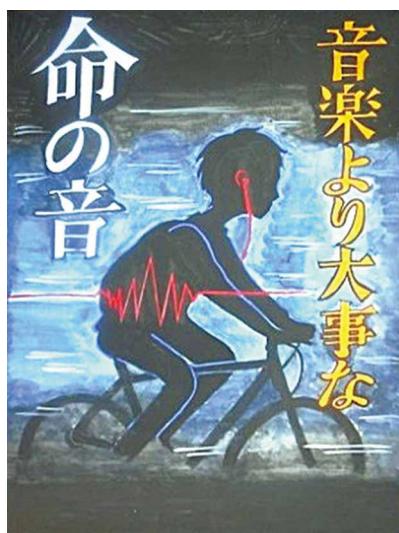
岩国市立玖珂小学校
6年 東 暖真



萩市立萩西中学校
3年 河本 姫佳



長門市立菱海中学校
2年 植木 來夢



私立聖光高等学校
2年 金子 阜詩

中学校の部

最優秀

命を守るためにできる」と

下関市立東部中学校

一年 内田 健太

僕は中学校に着くまでに、三つの横断歩道を渡る必要があります。ある日、僕が横断歩道を渡ろうとした時、車が来ました。その車

は横断歩道の前で停止をせず、そのまま通り過ぎました。その時、僕はその車にひかれそうだったので、とてもヒヤッとしました。

後日、登校してみると横断歩道に地域の交通指導員の方がいらっしゃいました。僕が渡るのをみると、「手を挙げて渡つてね」と、おつ

しゃいました。僕は少し不思議に感じましたが、手を挙げて渡りました。

また、後日、テレビで横断歩道を渡る時に手を挙げて渡る意思表示をする「ハンドサイン」を呼びかけてくる映像を観ました。手を挙げることは小さな子が渡つてくることを運転手に認識させやすくする他に、渡ることを伝えるための老若男女が使えるサインだと知りました。さらに調べると、全国各地でハンドサインを促す取組が行われていることを知りました。

それから、僕はハンドサインを行い始めました。登下校中に行うと、多くの運転手の方が僕を見て停止をしてくださいました。中には、手を挙げると笑顔で停止をしてくださる運転手の方もいらっしゃいました。僕はとても温かい気持ちになりました。ほんの一瞬の出来事ですが、地域の方とのつながりや人の

優しさを感じたことができました。

もあります。

このよつな体験をして、僕はハンドサインを行つてよかつたと感じました。ハンドサインは簡単に自分の命を守ることにつながる行動です。行つことで、「ヒヤッ」とする機会が減少し、事故が起つるリスクを減らすことができます。また、自分自身を守るだけではなく、地域の交通安全に対する意識を向上させることができます。なぜなら、ハンドサインを僕たちが行つてしまふことで、歩行者が横断歩道の前にいるときは一時停止をする運転手を増やすことができる。未成年である僕たちも地域の安全を促進することができす。これはとても素晴らしいことです。最近は地域の方との活動や連携が縮小されています。交通安全を通して、地域の活性化が見込まれます。

ハンドサインを行つて、考えたことが他に

今まで、僕は横断歩道を渡るのとあると車が止まつてくれるだらうと想ひ、何もせずに横断歩道の前で待つてきました。しかし、運転手の義務だからといって、運転手の方全員が止まつてくだされとは限りません。意思表示をしなければ、運転手に見えない場合があります。また、運転手の感じ方で「渡るつもりではない」と見なされるかもしれません。僕は運転手に頼り切つていました。運転手と歩行者はお互ひの安全を思ひやる必要があるのです。お互いの思ひやりが広がつていいくことで交通事故によつて苦しい思いをする人を減らすことができます。また、交通面以外でもひともよじ地域になります。

このように、交通安全を維持していくためには一人一人が「思ひやり」を大切にしていく必要があります。他にも僕達が実践できる

「思ひやり」があります。

まあ、反射板をつけることです。僕は夜に塾に通っています。その送り迎えを家族に車で運転してもらっています。その時に散歩をしている人を見かけます。散歩をする人の一部は反射板のついた服や靴を着用されています。着用されている方は薄暗い空間でもはつきりと認識することができます。しかし、着用されていない方はとても見づらいです。僕はとても危険に感じました。反射板をつけることでつけている自分と運転手が安心することができします。そして、反射板のメリットを周知させていく必要があります。

事故が生じてしまったとき、頭部を保護し、命を守ります。しかし、反射板と同様にヘルメットを着用せずに自転車に乗る人はいます。自転車は幼い頃から乗っていた人が多く、身近な車両です。そんな自転車の危険性を充分に学ぶ必要があります。

このよのな「思ひやり」を行つてもらうためには、自転車や自転車の危険性を正しく理解しなければなりません。そして、その危険はいつ降り掛かってくるかわかりません。そのため、油断は許されません。

自分の命を自分で守るために、自分でアクションを起こさなければなりません。そして、そのアクションは自分の命を守り、周りの人の命も守ります。僕はそんな行動が広がり、交通は安心、安全で温かい地域、そして日本になつてほしこです。



優秀

交通安全について

柳井市立柳井中学校

一年 岸田 稔実

私たちの暮らしにとつて、欠かせない要素である「交通」。学校に行くとき、買い物に出かけるとき、友人と遊びに行くときには、車、自転車、バス、電車、徒歩など常に何かしらの交通手段は欠かせません。これらの交通手段が私たちの日常生活を便利にしていますが、ほんの少しの油断が取り返しのつかないことがあります。取り返しのつかないことは、交通事故を指します。ニュースで交通事故について報じられる時、その多くが少しの不注意や油断が招いた結果であること強調されています。事故の背景にはどのよ

うなことがあぬか考へてこられたこと思います。まず一つ目は、最近増えている、スマートフォンを見ながらのながら運転やながら歩きです。私も学校の通学途中にスマートフォンを見ながら、自転車に乗っている人を見たことがあります。ながらスマホは周囲の確認がおろそかになり、重大な事故を引き起こす可能性が高い行為です。前方を見ていないだけでなく周りに注意を払っていない様子が見られ、とても危ないと感じました。ながら運転は死亡事故率が通常より高くなるという統計もあります。私はまだスマートフォンを持つていませんが、将来持った際には十分に気をつけたいと思います。

二つ目は、高齢者の事故の増加についてです。私は以前、「ヒヤリハット」を経験したことあります。家族と買い物を終えて車で帰宅する途中、私は助手席に乗っていました。

交通量の多い交差点で、突然、左側の歩道から高齢の女性が左右の確認をせずに、道路を渡ろうとしてきました。幸い、そのときは車がスピードを出していなかつたため、ぎりぎりのところで止むことができました。最近は高齢者の交通事故が社会問題になっています。高齢の歩行者は走っている車の直前や直後の横断による事故が多いそうです。運転の際には道路脇に高齢者を見かけたら、横断してくるかもしないと考えスピードを落とし、高齢者の動きに十分注意を払わなければいけないと実感しました。あの時ぶつかっていたら、その方の命はもちろん、運転していた家族の人生も大きく変わっていたかもしれません。交通事故は、一瞬の出来事だけで被害者と加害者を生み出し、さらにその家族や周囲の人々の人生を大きく変えてします。突然の別れや後遺症、心に負った

深い傷を防ぐには、私たちが「自分ごと」として交通安全を考え、高い意識を持つことが必要不可欠なのです。

三つ目に、見通しの悪い場所や時間帯の危険性について考えます。通学路や普段よく通る道の中には、交差点の角に建物があつて見通しが悪かったり、夜になると街灯が少なく暗い場所があつたりします。そのような場所では、いつも以上に気を付けなければならなことがあります。例えば、見通しの悪い交差点では、「かもしだい」という意識を持つことが非常に重要です。曲がり角の向こうから人や自転車が飛びだしてくるかもしない、と予測しながら行動し、自分が自転車に乗る際はいつでも止まれる準備をしておくことで、事故にあつ可能性を大幅に減らすことができます。また、薄暗いところや悪天候の時などは、視界が悪くなる時間帯や状

況に気をつけなくてはなりません。運転者からは歩行者や自転車が見えにくくなるため、反射材の付いた服装を着用したり、自転車のライトを早めに点灯せたりあるなど、「自分の存在を相手に知らせる」工夫も大切になります。歩行者としても、薄暗い場所では反射材を身につけるなど、自分の身を守るために意識を持つことが重要です。

交通事故のない、安全な暮らしを「[市]ねこば、私たち一人ひとりが「交通安全は自分ごと」として考え方、田頃から意識を持つことが必要です。運転しながらスマートフォンを操作しない、見通しの悪い場所では速度を落とす、高齢者や子どもの動きに注意するなど、日々の生活の中で少し意識を変えるだけで、多くの事故を防ぐことができると思うかも知れない。

交通ルールを「[市]ねこば、大切なことが、「相手を思ひやる気持ち」や、「危険を予

測する力」を持つことが、交通安全に繋がることだと私は思っています。私たち一人ひとりが、社会の一員として、安全な社会を築くために何ができるかを常に考え続けることが重要です。

あたり前の安全を「[市]ねこば

山陽小野田市立厚狭中学校

一年　末富　連

毎日の通学路、家族とのお出かけ、友だちと歩く帰り道。私たちは日々、道路を使って生活しています。その中で一番大切なのは「命を守ること」つまり交通安全です。でも、交通安全は「気をつけていれば大丈夫」と簡単に考えてしまつ人も多いかもしません。しかし、ほんの一瞬の不注意が、大きな事故につながる」ともあるのです。

僕は以前、通学途中で危ない場面に遭遇したことがあります。ある日、横断歩道を渡ろうとした小学生の子が信号が青になると同時に走り出しました。ところが、交差点に進入してきた車が、赤信号に気づかず止まるのが遅れてしまったのです。幸い、車はギリギリで止まり、大事故にはなりませんでしたが、その場にいたみんなが息をのんだ瞬間でした。このような出来事を見ると、「自分は丈夫」と思っていた気持ちが変わります。事故は、予想もしない時に、予想もしない場所で起じるものなのです。交通安全を守ることとは、自分の命だけではなく、まわりの人の命も守ることにつながります。

交通安全には、こいつの大切なポイントがあります。一つ目は、「信号や交通ルールをしっかりと守ること」です。青信号でも、すぐには渡らず左右を確認する。横断歩道以外では

道路を渡らない。自転車に乗るときは、ヘルメットをかぶり、歩道では歩行者を優先する。こいつは基本的なルールは、私たちが安心して生活するための約束です。

しかし、ルールだけではなく、「思いやの心」も大切です。たとえば、高齢の方や小さな子どもが道を渡つてじたり、車や自転車は必ず止まって待つべきです。また、歩行者の立場でも、車が来ていたら無理に横断しないように心がけたいです。「ね

互いを思いやる気持ち」が、事故のない社会をつくる第一歩になります。

最近ではスマートフォンの使いすぎによる「歩きスマホ」が問題になっています。画



面に夢中になつて前を見ていないと、段差につまづいたり、信号を見落としたりして大変危険です。また、自転車に乗りながらイヤホンで音楽を聞いている人も見かけますが、周りの音が聞こえなくなり、車が近づいてくることに気づかぬことがあります。このような行動は、自分だけではなく、他人の命も危険にさらすことがあります。

交通事故のニュースを見るたびに、胸が苦しくなります。「もし自分がだったら」「もし家族や友だちが巻き込まれたら」と考へると、とても他人事には思えません。事故が起きてから後悔しても、時間を戻すことはできません。だからこそ、事故を防ぐために今できることを考へ、行動に移すことが大切なのです。学校では交通安全教室や自転車講習などが行われます。正直なところ、「また同じ話か」と思つてしまひました。でも、何

度も聞く「」と「」によつて、その知識が自然と身につき、このように時に役立つのだと思います。命を守る「」とは、決して当たり前ではありません。「」だけでは不十分で、「実行する」とが何よりも大切です。

私たち中学生も、交通安全のためにできることがあります。たとえば、家族や小さなきょうだいにルールを教えてあげること。学校で呼びかけをしたり、地域の交通安全活動に参加する「」もできます。また、自分自身がよい手本となつて行動する「」で、周りの人にも「」を「」ることができます。
さうに、これから自転車だけでなくバイクや車を使う年齢になつたとき、交通ルールをしつかり守る姿勢を身につけておくことはとても大切です。運転する「」とは、常に他人の命を預かっているのと同じだといつ意識を持たなければなりません。

交通安全は特別なことではありません。毎日の生活の中で、一人ひとりが少しずつ気をつけることの積み重ねです。これからも「自分の命は自分で守る」ことを意識しながら、交通ルールを守って安全に過ごしていきたいと思います。

優 良

一人一人が気を付ける

和木町立和木中学校

二年 三田 千和

みなさんは、信号のない横断歩道を渡るときに、危ない思いをしたことはありませんか。例えば、横断歩道で車が止まってくれて渡ろうとしたとき、反対車線の車がスピードを落とさずに突っ込んできて、怖い思いをした、

などのことです。特に信号のない横断歩道では、歩行者がいるのにもかかわらず、一時停止をしないで、そのまま通りすぎてしまふ車も多く存在します。私の通学路には、信号のない横断歩道があり、そこを渡つて中学校に登下校をするのですが、車が止まるのを待つてじるときに、通過する車をたまに見かけます。本来、交通ルールとして、ドライバーは信号のない横断歩道を横断している、または横断しようとしている歩行者を認めたときには、必ず横断歩道の手前で一時停止をして、歩行者に道を譲るようになっています。これはマナーではなくルール、車を運転する人間にとっては破つてしまふと交通違反となるのです。横断歩行者等妨害等違反による処分として、違反点数二点、反則金が普通車で九〇〇〇円となってしまいます。このようなことをまだ多くの人が知らない、ところの事実

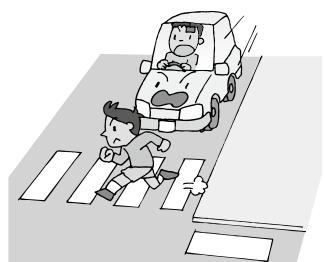
があります。ではなぜ、たくさんの車が交通ルールを守らなかったりしないのか、また、ルールを知ったうえで守るためにはどうしたらいいのか。運転手側と歩行者の二つの視点から考えてみます。

まずは、運転手側についてからです。一〇一三年に実施された、とある調査結果によると、信号のない横断歩道を通過する車両の数七〇八七台に対して、歩行者が渡ろうとしている場面で一時停止をした車の数は三一九三台、四五・一パーセントと、半分以上の車が止まっているという結果になっていました。私は、このような結果であることに驚きました。ですがもつと驚いたことは、過去の車の一時停止率が一〇パーセントを下回っていることです。一〇一三年の時点でも一時停止率は半分以下で、低い方であるにもかかわらず、それよりもっと低かったのも驚きました。ですがもつと驚いたことは、過

で、とても驚きました。それぞれ都道府県別の一時停止率が一番高かつた所は長野県でした。反対に一番一時停止率が低かつた所は新潟県でした。全体的に見て、一時停止率はさらに上げることができるのではないかと考えました。私はこれらの資料を見て、信号のない横断歩道での一時停止しない車の多さを、改めて確認することができました。ですから私は、もっとたくさん車が一時停止を守るようになるために、運転する人は常に思いやりを持ち続けて、まわりの車や歩行者に気を付けて運転すると、一時停止をする人が増えると思いました。

次に、歩行者側について考えてみます。先程、運転をする人達はまわりに気を付けて運転すると良いとなりました。ではどのように事故を減らすようにするには、歩行者はどのように気を付けた方がいいのでしょうか。

主に大事だと感じる一つのことは、横断する意思をドライバーに示すことと、左右を確認することです。横断する意思を示さなければ運転する人達にとって、



渡るのか渡らないのかの判断材料に欠けてしまって、一時停止できるものができなくななる可能性があるからです。そして、左右の確認を怠つてしまつた場合、とびだしたことによつて、事故に遭う危険性もおおいにあります。ですから、このような危険な目にあわないためにも、きちんと左右から来ている車を確認してから、渡る必要があるといつわけです。他にも横断歩道ではない普通の車の通る道路を横断している人をたまに見かけるので、その人達は警察の方から注意を行つたり、

あまりにもそのような人が多い場合は、新しい横断歩道をつくつたりすれば、少しでも事故を減らせるのではないかと考えました。

悲しい事故を減らすためには、運転手側と歩行者側、一人一人が交通ルールを理解し、守つていいくことが大切なのだと分かりました。私は今回、この作文をとおしてはじめて、交通ルールの名称や詳しい事柄について学ぶことができました。もっとみんなに交通ルールを知つてほしいので、小学校や中学校で講演会をするなどして学べる機会を増やすことで小さい頃からさらに、理解を深めることができるのではないかと考えました。ですが、頭で理解していくと、守るところの心意気がなければほぼ意味のないものになつてしましますので、一番は守るところのことなのだと思つました。信頼のない横断歩道は、普段の日常生活でもよく使用するものです。この作

文で学んだことを生かしてこれからも、事故なく平和に過ごしてこられたのです。

交通安全は、思いやりの心から

下関市立文洋中学校

三年 田中 彩結

私は、交通安全について伝えたことが二つあります。一つは「恐怖」、もう一つは「感謝」です。この二つの感情は、私が毎日通る学校の前の横断歩道で体験した出来事から生まれました。その場所には信号機がなく、車の交通量も多いので、いつも渡るのに苦労しています。

ある日の登校中、私はいつものように横断歩道の脇に立ち、車が途切れるのを待っていました。すると、数台の車が勢いよく通り過ぎていき、止まってくれる気配が全くありません。

せんでした。私は車が止まってくれるか不安になりました。ただ車が途切れるのを待つことしかできませんでした。その瞬間、交通社会の冷たさを感じずにはいられませんでした。しかし、その後、私の不安な気持ちを吹き飛ばしてくれる出来事が起きました。多くの車が通り過ぎてゆく中、ある一台の車が、私の前でゆっくりとスピードを落とし、完全に停止してくれたのです。そして、運転手さんがにこやかに「どうぞ」と手で合図をしてくれました。その瞬間、私は安堵し、胸いっぱいに感謝の気持ちがこみ上げてきました。この運転手さんは急いでいたのかも知れません。それなのに、私という歩行者の存在に気づき、ルールを守って止まってくれた。その親切な行動は、私の心を温かくしてくれました。

この二つの対照的な体験を通して、私は交通安全の本質は、単に法律やルールを守るこ

ただけではなじと強く感じました。もちろん「横断歩道は歩行者優先」というルールは、歩行者の命を守るために欠かせない大切なものです。しかし、ルールがあるだけでは不十分で、そこに「譲り合ひ」や「思いやり」という心が加わって、初めて本当の安全が生まれるのだと気づきました。ではなぜ、一部の車は横断歩道で止まってくれないのでしょうか。おそらく、急いでいたから、歩行者に気がつかなかつたから、ところう理由があるのかもしません。一方で、私たち歩行者も、スマートフォンを操作しながら道を渡つたり、イヤホンで周りの音が聞こえなくなつたりすることができります。交通安全はドライバーだけの責任ではなく、私たち歩行者一人ひとりも真剣に考えなければならない問題なのです。

安全な社会を築くためには、まず私たち一人ひとりの意識を変える必要があります。ア

ライバーは「むしむし」に自分の家族が立つていたり」と想像し、歩行者は「自分が運転手だったり」と考える。そつした想像力が、相手を思いやる気持ちにつながり、結果としてお互いの命を守る」とになるのではないか。

私は、あの時道を譲つてくれたドライバーサンのように、誰かの安心を守れる存在になりましたと強く感じます。そして、いつか車を運転するようになつたり、横断歩道では必ず一時停止し、歩行者に「どうぞ」と笑顔で合図を送つたうです。そして、私たちが住む街から「怖い」と感じる瞬間がなくなり、誰もが安心して道を歩ける、そんな未来を心から願っています。交通安全は、技術や制度だけで実現するものではありません。それは、私たち一人ひとりの心から生まれる「思いやり」なのだと、私は信じています。

点検整備を受けた自転車に乗りましょう。

- 自転車安全整備店で点検・整備を受けると、その証としてTSマークが自転車に貼付されます。年1回は点検整備を受けましょう。
TSマークには、賠償責任保険と損害保険の2つがセットになった1年間の付帯保険が付いており、もしもの時に安心です。
- お近くの自転車安全整備店へご相談ください。



	賠償責任補償限度額	被害者見舞金	傷害補償保険金額	
		入院15日以上の傷害	死亡・重度後遺障害(1~4級)	入院15日以上の傷害
緑色 TSマーク	死亡・損害(制限なし) ※示談交渉サービス付き 限度額1億円	なし (賠償責任補償により対応)	一律50万円	一律5万円
赤色 TSマーク	死亡・重度後遺障害(1~7級) ※示談交渉サービスなし 限度額1億円	一律10万円	一律100万円	一律10万円

山口県では令和6年4月1日「山口県自転車の安全で適正な利用促進条例」が制定され、自転車損害賠償責任保険等への加入が義務化されています。

自転車を利用される方は、自転車損害賠償責任保険等へ加入しましょう。

